

にんじん（夏播き秋冬穫り）

栽培暦

作型	7	8	9	10	11	12	1	2	3
夏まきは種	-----			—————			-----		
				収穫					

栽培の特徴とポイント

極端な早播きでは、苗立ち不良や根部障害の多発生、抽台などで商品化率が著しく低下するので、7月下旬以降の播種がよい。播種後から6葉期までに乾燥すると十分な肥大を確保できなくなるので、こまめにかん水する。播種後60日頃から急速に肥大することから、その時期に肥料が安定して効くような施肥とする。

品 種

- 向陽2号：草勢が強く、晩抽性で早太りする。尻部までよく肉付きし、根割れが少なく、揃いがよい。
 (タキイ) 根色は鮮紅色で品質がたく、多収性の5寸ニンジンである。
- 夏蒔鮮紅五寸：耐暑性に優れ、肥大が早く、夏まきで年内～早春どりに適する。生育旺盛で葉色は濃く、
 (タキイ) 立性で作りやすい。根形は総太り型で、尻づまり良く、根色は向陽2号にらべやや淡い。

本ば管理

1 ほ場準備

完熟堆肥を前作又は整畦の1カ月以上前に10a当たり、2~3t程度施用し、膨軟な土作りに努める。砕土が不十分であったり、前作物の残さがあつたりすると岐根になり易く、覆土が不均一になれば、発芽は不安定になるので、耕うん、整地はていねいに行う。畝幅は、110~120cmとし、畝間かん水ができるように、また、ほ場の透水性に応じて高さ20cm以上の高畦とする。

2 施肥

肥大が旺盛になる前の本葉4~7枚期に、肥料が十分効いていることが重要である。また、石灰の吸収量が多く、酸性土壌では生育が劣るのでpH6~6.5を目標に石灰施用する。

肥効調節型肥料を活用すると追肥を1回に省力でき生育も安定する。

肥料名	総量	基肥	追肥		成分量		
			1回	2回	N	P	K
完熟堆肥	2t	2t					
苦土石灰	100	100					
熔 燐	40	40				8.0	
有機肥料	80	80			4.8	4.8	4.8
高度化成	80	80			8.0	12.0	12.0
追肥化成	50		20	30	9.0		9.0
合計					21.8	24.8	25.8

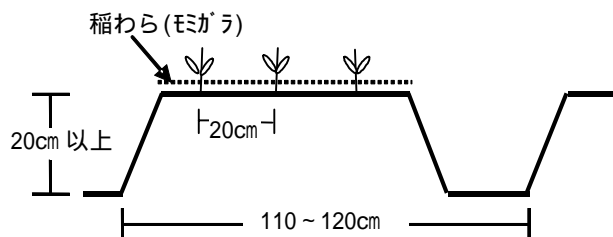
(kg/107-ℓ)

3 播種

- 1) 時期 7月下旬~8月15日
- 2) 播種 株間10~12cm、3条まき、条間20cm、10a当たり25,000株を目標とする。

種子は、コーティング種子では7万粒程度、普通種子ならシートテープに4~5cm(早期

出荷を狙うには間隔を広めに)に封入し、条まきする。覆土は厚くならぬように、5~8mmに均一に行い、覆土後に必ず鎮圧する。鎮圧後に3cm程度に切った稲わらまたはモミガラを薄く散布しておく。



乾燥しやすい時期は、雨後に播種するか、播種後に十分かん水する。乾燥しやすい土壌では、播種後3日目にもう一度かん水を行い発芽を促す。順調なら約5日目に発芽を始め、7日目頃発芽揃いとなる。

4 除草剤散布

播種直後の土壌表面に適度な湿度が残っている頃には、粒剤を使用し、乾燥している場合は、水を多めに乳剤を用いて散布する。

5 かん水

【発芽～6葉】根の肥大を決める重要な時期なので、十分な水分と養分が大切であり、地温の低い時間帯に畦間かん水をこまめに行い、適湿を保つように注意する。

【肥大充実期：7葉～15葉】土壌水分が多いと過繁茂となって、根の肥大が遅れ、品質も悪くなるので、かん水を控え、土壌を乾燥気味に管理する。

6 間引き

根傷みしないように土に湿りのある状態で行う。1回目は、2～3葉期と5～6葉期の2回に分けて行うとよいが、1回で済ませる場合、5～6葉期までに株間10～12cmに1本立てとする。

奇形や岐根を除くため、葉数が多いもの、葉や葉柄に毛が多いもの、葉色が濃いもの、ロゼット状の葉形のもの、黄色葉株、その他生育不良株等を抜き取り、大、小が無く、平均になるように揃える。

7 中耕・土寄せ

中耕は、乾燥時に土表面の固結を壊し、養水分や空気を土壌中に供給しやすくすることや除草の効果が、2～3葉期の第1回追肥時に、条間に条線を付ける程度でも効果がある。

土寄せは、ニンジンの肩部が露出し、緑変するのを防ぐために行い、2回目の最終間引き後に、にんじんの肩の部分が完全に隠れ、心芽は隠れない程度とする。

8 追肥

間引きと追肥作業は同時期におこなう。1回目は条間に、2回目は畝肩に施用する。省力のため、間引きを5～6葉期にのみ行う場合は、2～3葉期に追肥後、軽く中耕を行うと良い。

病害虫等防除

黒葉枯病：肥料切れや乾燥による生育不良を起こさない。排水を図ると共に、台風や大雨等の直後、初発を見たら、5～7日おきに3回位薬剤散布する。

ネキリムシ：高温期のため土壌害虫の発生も多く、播種時の粒剤散布は必須である。

裂根：病害ではないが、収穫遅れや土壌の乾湿の差が激しいと裂根することがあるので注意する。

収穫

7月まきの早いものは、90日目頃からM級の間引き出荷が可能であり、その年の気象にもよるが、L級を中心に年内一杯収穫する。また、8月中旬まきは、12月に入って収穫が始まり、夏まき鮮紅五寸では2月下旬～3月上旬の越冬どりもできる。その後、暖かくなって消雪とともに新根が発生し再生長を始め、裂根や表皮の硬化が発生し易くなる。収穫したら、洗浄、風乾後、箱詰め出荷する。

販売のポイント

県内市場は、毎月500tの安定した需要が見込めるので、10月～12月にかけての継続出荷と融雪時の3月に出荷するとともに、高品質生産により、市場での有利販売に努める。